

アモウラ東遺跡

— 確認調査報告書 —

1990.3.

津山市教育委員会

序

津山市は中国山地に形成された津山盆地を中心に位置しています。盆地の中北部は津山城下町として古くから栄えてきたところであります。昨今の宅地化あるいは開発の波は盆地の周辺部から丘陵地帯にまで及び、城下町時代には想像もつかないほどの様変りをみせているのが現状であります。

今回のアモウラ東遺跡の確認調査もまさに丘陵地帯にまで開発が及んだ例と言えます。遺跡というのは現地表面での観察ではなかなかわからないものです。特に、山林等の場合、畠や田んぼとは違って開墾されていないので遺物を探集することはまず皆無と言っていいでしょう。このような状況でありながら本遺跡は事前に遺跡の扱いをしておりました。と言いますのは、西に丘陵を隔てて弥生時代中期を中心としたアモウラ遺跡が調査されており、隣接地という扱いをしていましたからであります。

確認調査の結果、数遺構が発見され破壊から免れたことは大きな喜びであります。

最後に調査にあたり御協力いただいた関係者各位に対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

1990年3月31日

津山市教育委員会
教育長 萩原 賢二

例　　言

1. 本書は岡山県森林組合連合会が計画した貯木場造成に伴うアモウラ東遺跡の確認調査報告書である。
1. 本遺跡は從来まで、広域林業構造改善事業文化財発掘調査委員会が1981～82年にかけて発掘調査を実施したアモウラ遺跡に一括させて取扱ってきたが、谷を隔てた東側の丘陵に位置すること、以前全面発掘調査を実施したアモウラ遺跡との混亂を解消するため、あえてアモウラ東遺跡と命名し独立させた。
1. 発掘調査及び報告書作成作業は津山市教育委員会文化課主事行田裕美が担当した。
1. 整理作業には赤松百合子、内田まち子、木元美子、木村祐子の協力を得た。
1. 本書第1図に使用した「アモウラ東遺跡と周辺遺跡分布図」は建設省国土地理院発行5万分の1(津山市西部)を複製したものである。
1. 本書に用いた方位は磁北である。またレベル高は海拔高を示す。
1. 本確認調査事業は国庫補助金を得て実施した。

本文目次

| | |
|------------------|----|
| I 位臵と周辺の遺跡 | 1 |
| II 調査の経過 | |
| 1 調査に至る経過 | 2 |
| 2 調査経過 | 2 |
| 3 調査体制 | 4 |
| III 調査の記録 | |
| T-1 | 4 |
| T-2 | 8 |
| T-3 | 8 |
| T-4 | 10 |
| T-5 | 11 |
| T-6 | 10 |
| IV まとめ | 12 |

I 位置と周辺の遺跡

アモウラ東遺跡は岡山県津山市一宮1238-1番地他に所在する。津山市街地の北西に位置する標高308.4mを測る神楽尾山塊から北西方に派生した丘陵の先端部付近の南西斜面に位置する。このあたりの地形は樹枝状に派生した丘陵の間に形成された小支谷が入り混った複雑な地形を呈している。平野部との比高差は10~40mを測る。

周辺の遺跡に目を向けると、まず第1にアモウラ遺跡が上げられよう。アモウラ遺跡は1981~82年にかけて発掘調査が実施された。遺跡は丘陵上に位置し、ほぼ全域を調査している。弥生時代集落址及び土墳墓群、古墳時代集落址等が検出されている。この地域では発掘調査例が少なく屈指のものである。田邑丸山古墳群は計9基の円墳よりなる古墳群である。中でも1号墳は最も大きく、径37mを測る。内部主体は堅穴式石室で乳文鏡1面、鉄斧2、鉄剣1の他に銅鏡2点が出土している。他の古墳、遺跡については分布調査であり、詳細は不明である。



第1図 アモウラ東遺跡と周辺主要遺跡分布図 (S=1:50,000)

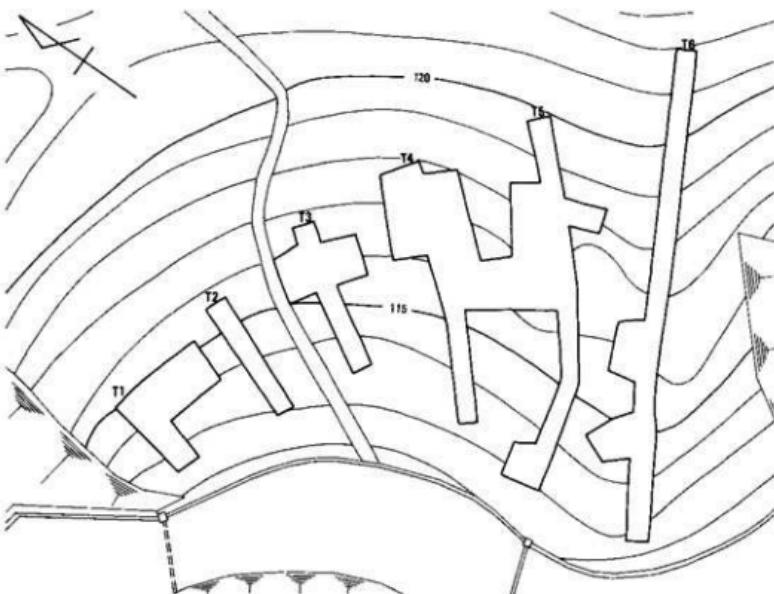
II 調査の経過

1 調査に至る経過

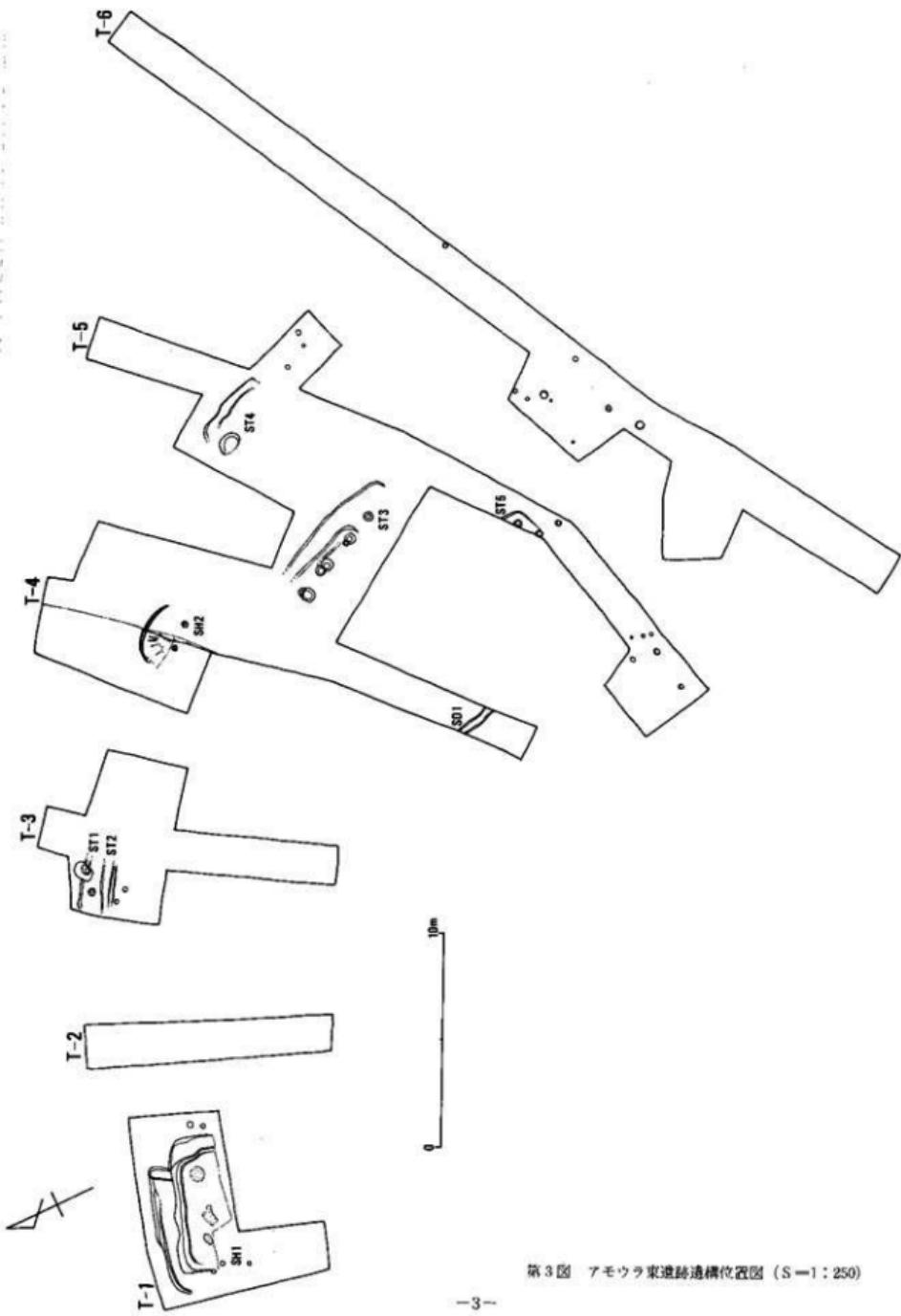
岡山県森林組合連合会から津山市教育委員会に津山市一宮所在の岡山県森林組合津山支所に隣接して、貯木場を造成したい旨の協議がなされた。これを受け津山市教育委員会は昭和60年12月17日バックホーを借りて、応急の確認調査を行なった。この結果、数ヶ所の遺構の存在を確認した。その後、工事計画は中断し、今日をむかえるにいたっていた。昭和63年になり、再び工事計画が再浮上し、今回正式に詳細な確認調査を実施する運びとなった。

2 調査経過

調査は11月6日から開始した。まず事前に雑木の伐採を済ませておいたので、雑木の片付けから行なった。11月7日～11月17日まで6本のトレントを設定し、精査を行なった。11月20日から遺構のかかっているトレント、すなわちT-1、T-3、T-4、T-5、T-6を拡張



第2図 アモウラ東遺跡トレント配置図 (S=1:500)



第3図 アモウラ東道路造構位置図 (S-1:250)

した。11月22日からT-1のSII1住居状遺構の掘り下げを開始した。多量の遺物が出土したため12月6日までを費した。12月7日からSH1住居状遺構の実測と併行してT-3のST1、ST2段状遺構、T-4のSH2住居址の掘り下げを12月8日まで実施した。12月11日から12月19日までT-4とT-5の間のST3段状遺構の掘り下げとT-1～T-3までの清掃と写真撮影を実施した。12月20・21日の両日T-5の拡張を行なった。12月22日現在でのT-5、T-6の清掃、写真撮影を実施し、平成元年の作業を終了した。

平成2年は1月8日から開始した。T-5、T-6の精査を行ない、1月9日には発掘作業を終えた。1月10日～1月12日まで測量作業を実施し、すべての作業を終了した。

3 調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が調査主体となり実施した。調査体制は下記のとおりである。

津山市教育委員会 教育長 萩原賢二
教育次長 藤田公男
文化課長 須江尚志
文化係長 棚山三千穂
主任事務官 行田裕美（調査担当）

なお、発掘調査作業から報告書作成まで、下記の方々の御協力、御教示をいただいた。記して厚く感謝の意を表したい。

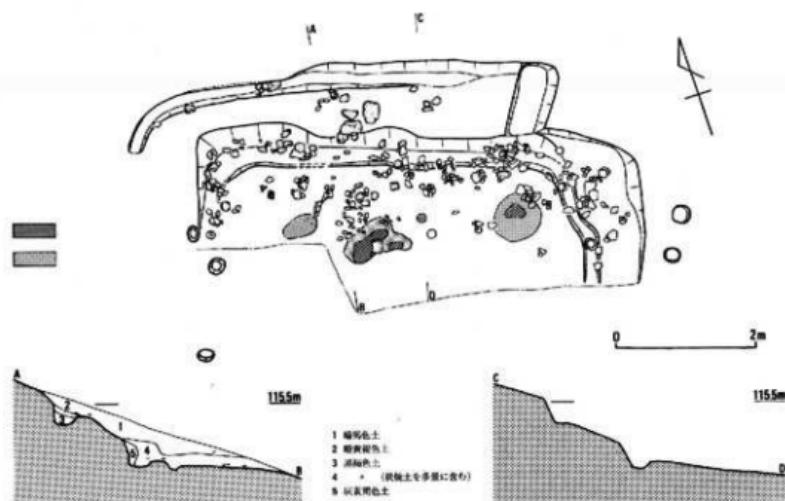
草薙 寛、草薙千枝子、草薙珠江、草薙志茂子、草薙茂子、中尾美佐子、赤松国幹、森本慎一、木村祐子、赤松百合子、小谷善守、木元英子、内田まち子

III 調査の記録

T-1

SII1住居状遺構の西端がトレンチにかかったため、東側に拡張し完掘した。丘陵斜面を削平し、幅約2m、長さ約6mを測る平坦面を形成している。基本的に壁際にそって浅い溝がめぐるが、東端は壁までには及ばず、途中で南に折れ曲っている。北側の上位には壁から50～80cmの距離をおいて小規模な溝が位置する。さらにその溝の東側には時期不明の土壌が切り合っている。新旧関係は土壌の方が古い。床面はほぼ水平で3ヶ所に焼上面が認められた。中央部と東側のものは非常によく焼けており、中心部は黄赤褐色を呈し堅い。調査面積は51m²である。

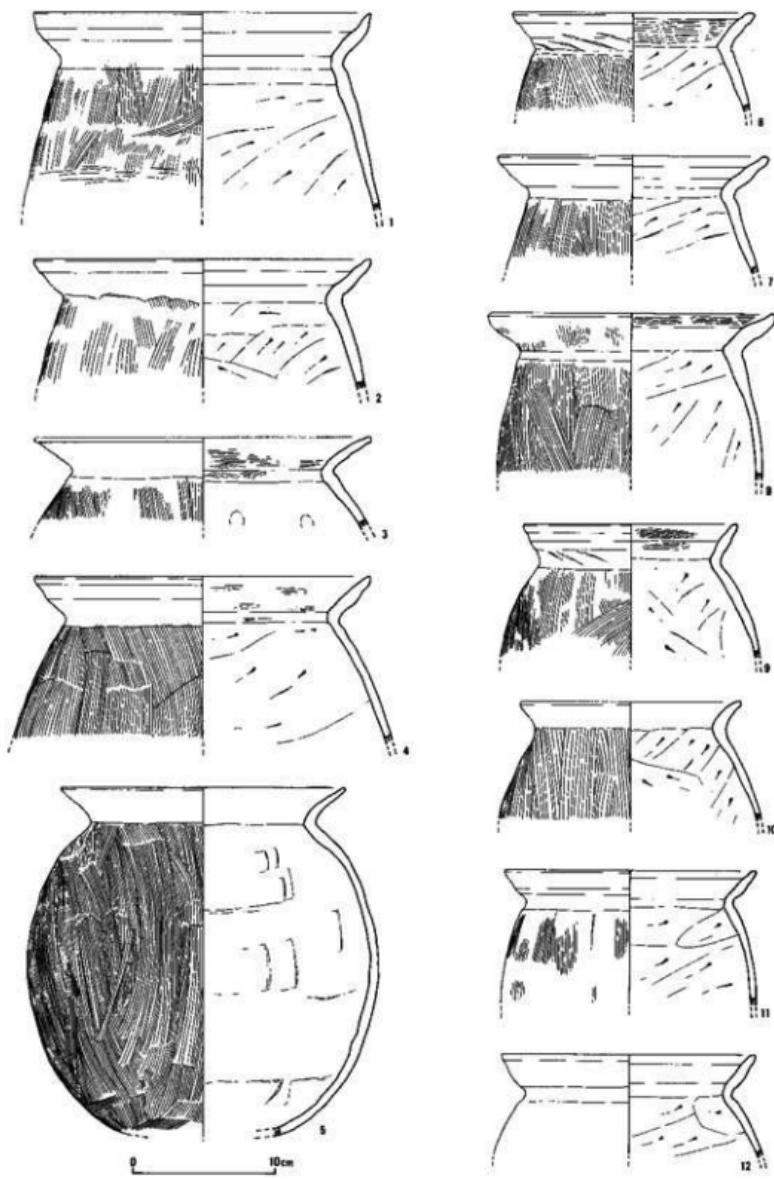
遺物は多量の土師器の他に須恵器、鉄器、鐵滓等が出土した。いずれも床面から埋土下層にかけての出土である。1-26は土師器変形土器である。1-5、13-18、26の大型のもの、6



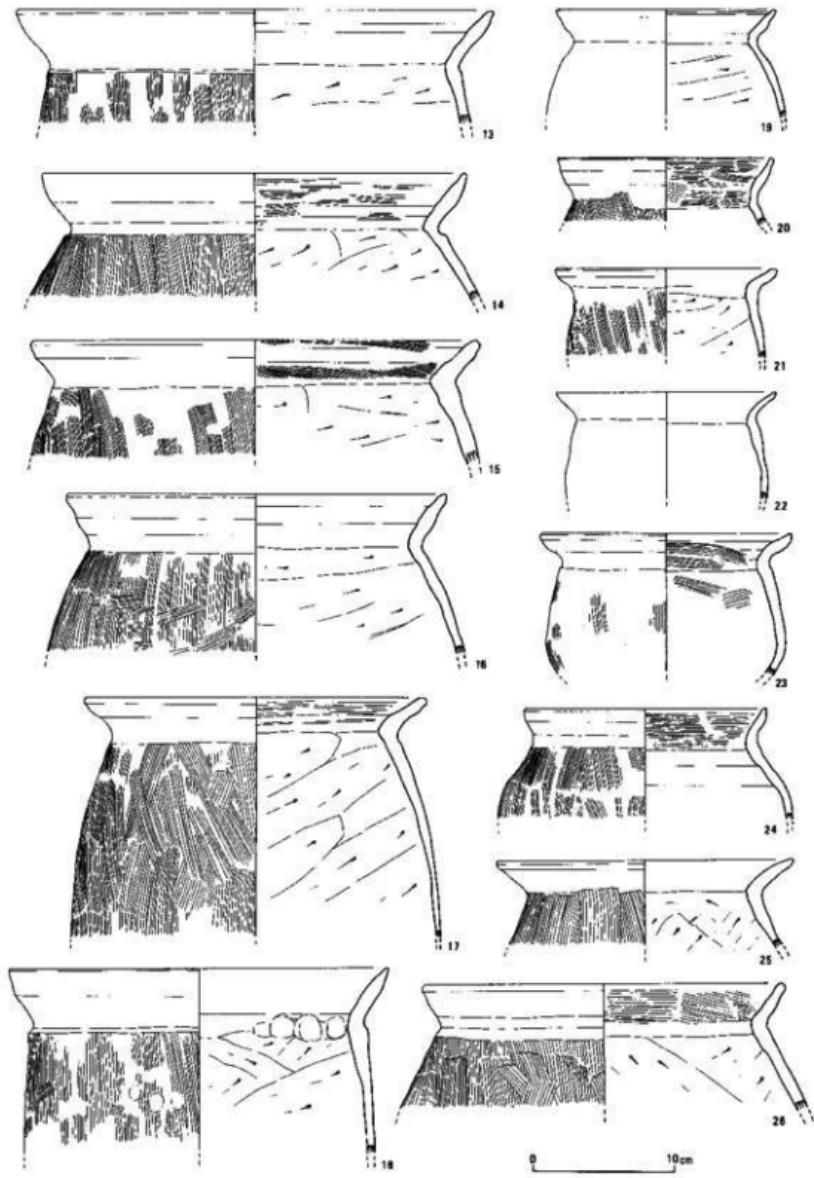
第4図 SH 1 住居状遺構平面・断面図 (S=1:80)

~12、24、25の中型のもの、19~23の小型のものの3グループに分類できる。大型・中型のものの器形は5を除き全体的に細長く長楕円形を呈す。調整は基本的に外側は頸部のくびれから口縁端部にかけては横ナデ、他は縱方向のハケ目である。内面は口縁部に横ハケを用いるものと、横ナデ仕上げの2種類がある。頸部下位はヘラ削りを多用するが、5などのようにナデ仕上げのものもある。27~29は瓶形土器である。30は用途不明の土製品である。支脚と考えられる2本の突起をもち、さらに縦を通すと想定される穿孔があるものである。31も正確な用途は不明なものである。図の下端は面をもっており生きている。筒部はヘラ削りにより断面9角形に仕上げられている。そして、中は中空で径1.5cm強の穴が貫通している。32・33は鉄製品である。32は柄部に木質が接着しており、着柄したものである。断面は4面とも面をもつことから側刃が刃部になることはない。先端部が欠損しているか否かは不明である。33はスバナ状のものである。一方の端部を欠く。両者とも用途は特定することはできない。34~46は須恵器47~49は土師器である。34・35は杯蓋、36~40は杯身である。受部の立ち上がりをみると、36・37のように退化したものと38~40のようにやや立ち上がるものが認められる。41~44は高杯である。44は赤褐色を呈し土師質である。45は非常に焼きの悪い椀である。46は壺の口縁部である。

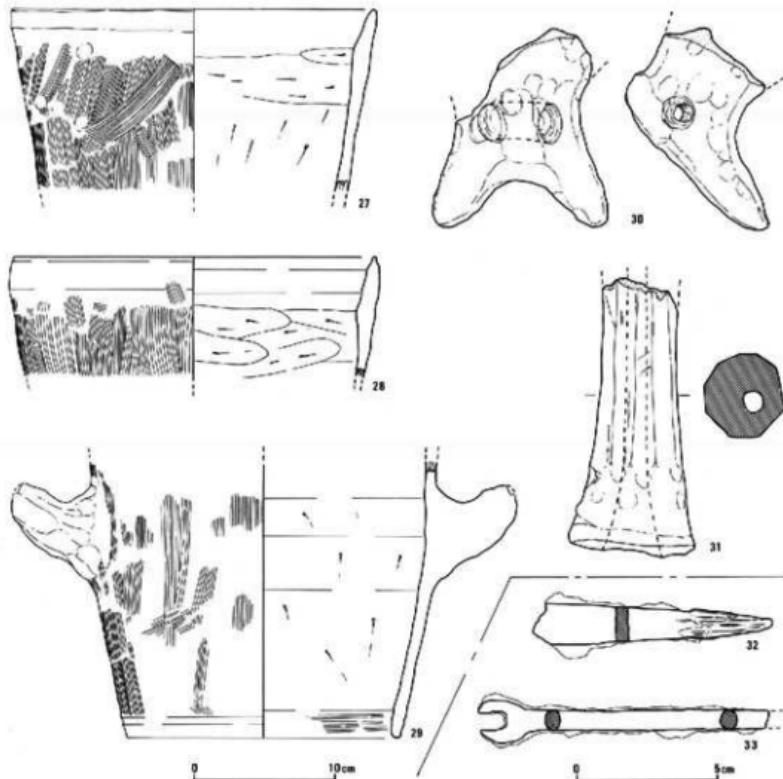
以上、図示し得たものの概要を説明したが、他にも瓶形土器の把手など時間的制約で図化できないものが、ほぼ倍近くあることを付記しておきたい。また、鉄滓20数点、鉄分を多く含んだ礫等も出土している。



第5図 SH 1 件岩状造構出土遺物(1)



第6図 SH 1 住居状遺構出土遺物(2)



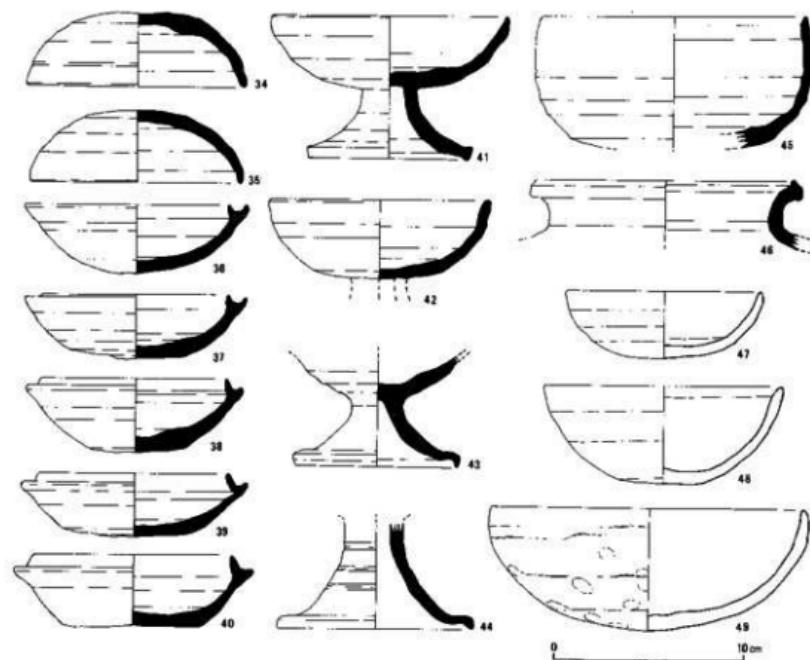
第7図 SH 1 住居状遺構出土遺物(3)

T-2

須恵器、土師器が数点出土しただけで、遺構は何も検出されなかった。調査面積は24m²である。

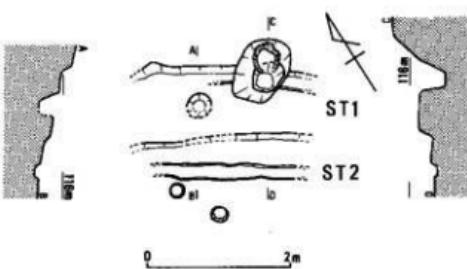
T-3

トレンチの西側にST1、ST2段状遺構が、東側には深い土壠状の掘込みがわずかにかかったので東西両方向に拡張した。しかし、東側の拡張区のものはシミ状の土色の変化だけでは遺構は存在しないことが判明した。西側の拡張区ではST1、ST2段状遺構の全容を検出した。ST1段状遺構は丘陵斜面を削平し幅約1m、長さ約2.5mを測る平坦面を形成している。平坦面には径約30cm、深さ約30cmを測る柱穴1個が位置する。縁際には深い溝がわずかに遺存している。この溝のほぼ中央部に大型のビットが位置する。ビットの埋土上層よりリング状の



第8図 S II 1 住居状遺構出土遺物(4)

炭化材が出土した。この炭化材は薄く平面的に広がっているだけであり、柱材が焼けたような状況はない。S T 2段状遺構はS T 1段状遺構の斜面下位に隣接する。幅約1m、長さ約2mの平坦面を形成し、壁から約40cmの距離をおいて平行に浅い溝が位置する。さらに溝の南には小規模なピットが2個検出された。



第9図 S T 1・2段状遺構平面図 ($S = 1:80$)

遺物はS T 1、S T 2段状遺構検出時に鉄滓1点、須恵器、土師器の小片が数点出土しただけである。第15図50が図示し得た唯一である。調査面積は58m²である。

T-4

S H 2 住居址と S D 1 溝を検出した。このため、他の住居址の存在の可能性を求めて広範囲にわたって拡張した。しかし、住居址は他には確認されず S T 3 段状遺構の北端の一部が検出されただけであった。S H 2 住居址は復元径約 3 m の小規模なものである。主柱穴は 2 個である。火災にあっており、垂木と考えられる炭化材が放射状に検出された。

遺物は床面より数点の弥生土器片が出土したが、図示できたものは第15図56の 1 点だけである。縦方向のハケ目の上に連続刺突文をめぐらしているもので弥生時代中期に属する。

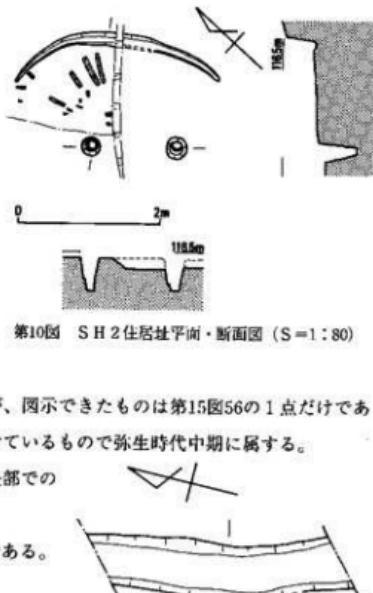
S D 1 溝は上面幅約 40 cm、底面幅約 20 cm、中央部での深さ約 15 cm を測る。

遺物は須恵器、土師器片が数点出土しただけである。

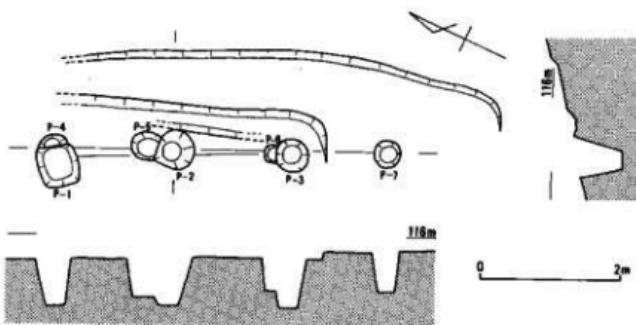
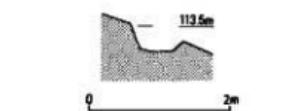
T-5

S T 4 段状遺構、S T 5 段状遺構が検出された。他にトレンチ下端にピット数個がある。このため、S T 4 段状遺構、ピット部分を建物の可能性を求めて拡張した。

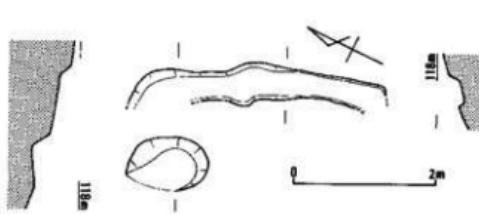
S T 3 段状遺構は T-4 で確認されていたので、T-5 第11図 S D 1 溝平面・断面図 (S=1:40)



第10図 S H 2 住居址平面・断面図 (S=1:80)



第12図 S T 3 段状遺構平面・断面図 (S=1:80)



第13図 ST 4段状遺構平面・断面図 ($S=1:80$)

まで拡張し全容を検出した。

ST 3段状遺構は2時期に分れる。最初の時期のものは斜面を削平し幅約1.5m、長さ約4mを測る平坦面を形成している。平坦面にはP-1～P-3の3個の柱穴が壁に平行に一列に並ぶ。各柱穴の心々距離はP-1～P-2が1.6m、P-2～P-3が1.7mを測る。實際には部分的に浅い溝が位置する。新しい時期のものは山側上位に平坦面を拡張することにより形成されている。P-4～P-7の4個の柱穴が壁に平行して一列に並ぶ。P-4～P-6は古い時期のP-1～P-3とそれぞれ重複して位置する。各柱穴の心々距離はP-4～P-5が1.4m、P-5～P-6が1.8m、P-6～P-7が1.6mを測る。

遺物としては両者の埋土中より土師器、須恵器片が若干量出土した。他にP-4の埋土中より土師器、須恵器片数点が出土した。図示し得たのは第15図54の土師器鉢形土器の把手だけである。

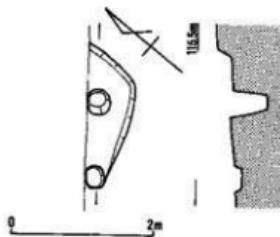
ST 4段状遺構は長さ約3.5m、幅30～40cmの浅い溝が「コ」の字状に位置し、その下位に浅い皿状の土壤が検出された。

遺物は、遺構検出時及び溝の埋土中より出土した。土師器、須恵器片若干量と鉄滓3点である。さらに浅い土壤の底面より第15図59の土師器の鉢形土器1点が出土した。内面はヘラ削りの後ナデで仕上げている。外面は口縁部がナデの他はハケ目仕上げである。

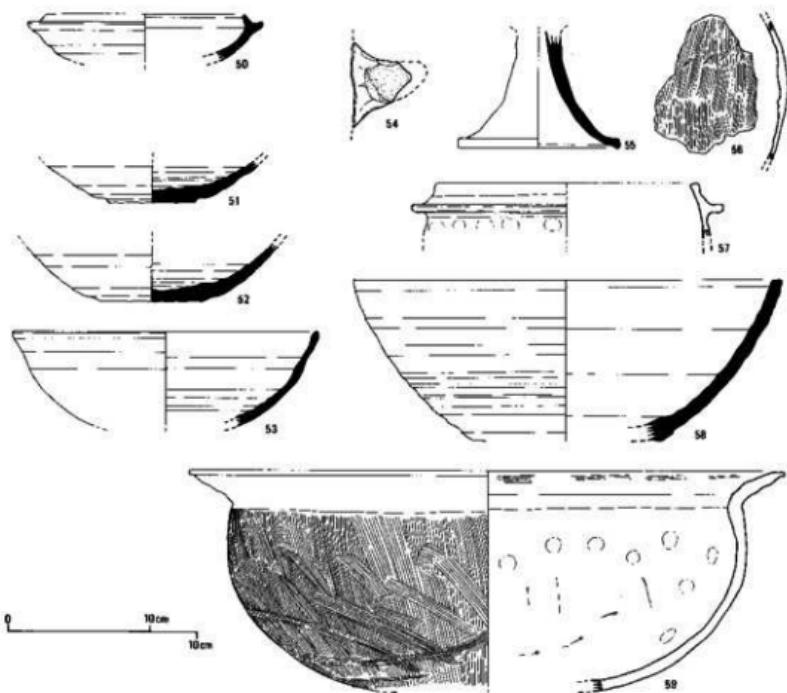
ST 5段状遺構は幅70cm、長さ約2mの範囲でトレンチにかかった。時間的制約があり拡張はできなかった。中央部の柱穴埋土より土師器、須恵器片が数点出土した。第15図55が図示し得た唯一である。T-4、T-5の総発掘面積は250m²である。

T-6

柱穴と考えられるピットが数ヶ所検出された。このため柱穴の位置する個所を建物の可能性を求めて拡張したが建物は検出されなかった。他に遺構は確認されなかった。第15図53、58がピットから出土したものである。53は椀、58は鉢形土器であるがいずれも勝間田焼である。51、52、57は拡張時に出土したものである。発掘面積は120m²である。



第14図 ST 5段状遺構平面・断面図 ($S=1:80$)



第15図 その他の遺構及び包含層出土遺物 (54・56~59はS=1:4、他はS=1:3)

IV まとめ

今回の確認調査では時間のゆるす限りトレンチにかかった遺構は拡張し、全容を把握するよう努めた。この結果、工事予定地内の遺構はほぼ検出できたものと思われる。時期は弥生時代、古墳時代、中世の3時期に分れる。

弥生時代に属するものはSH2住居址だけである。床面から出土した土器片から弥生時代中期に属するものである。他に同時期の遺構が確認されないことから大規模な集落が存在した可能性は認められない。

古墳時代に属する遺構がこの遺跡の大半をしめる。すなわちSH1住居状遺構、ST1~5段状遺構がそれである。これらの遺構の性格については不明な点が多いが、SH1住居状遺構、ST1・2・4段状遺構から鉄滓が出土しているという点では共通している。このことから推

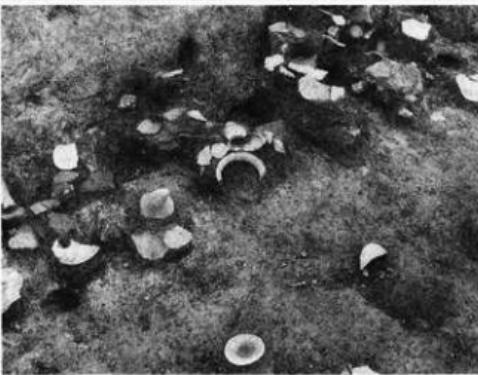
測すれば何んらかの形で製鉄に関与していた集団を想定することはできよう。特に、S H 1 住居状遺構では鉄滓と生活用品である須恵器、土師器が多量に出土しており、このことを裏付けるものと考えられる。

中世に属するものは S D 1 溝、T - 5 下端の柱穴群、T - 6 の柱穴群である。遺物としては土鍋片、勝間田焼の椀、こね鉢等がある。

以上のことから、本遺跡の主体は製鉄に関連した遺跡であるということができると考えられるが、その時期はいつ頃に求められるのであろうか。S H 1 住居状遺構出土の須恵器杯を例に考えてみよう。34・35の杯蓋、36~38の杯身の口径はいずれも11cm強と小さいこと、杯身の受け部立ち上がりが低いこと、特に36は口縁部と同じ高さであることなどの特徴があげられる。これらの特徴は田辺編年の T K 209型式（註1）、中村編年の II型式 6段階（註2）に相当し、その年代は6世紀末~7世紀初頃に比定されよう。

（註1）田辺昭三『須恵器大成』 角川書店 1981年

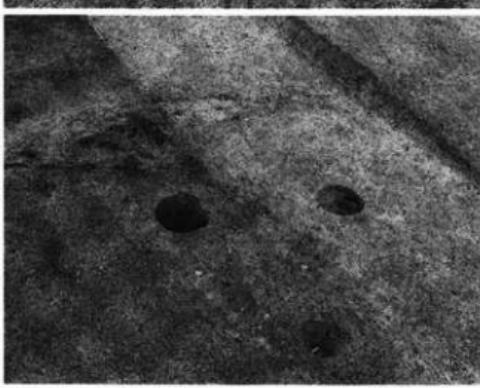
（註2）中村 浩『和泉陶器の研究』 拍告房 1981年



1 調査前遺跡遠景
2 発掘作業風景

3 発掘作業風景
4 T-1 全景

5 SHI 住居状造構
6 遺物出土状態



1 SH1 住居状造構造物出土状態
2 T-2 全景

3 T-3 全景
4 ST1+2段状造構

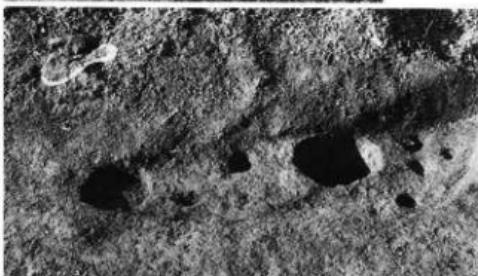
5 T-4 全景
6 SH2 住居址



1 ST 3段状遺構
2 T-5全景

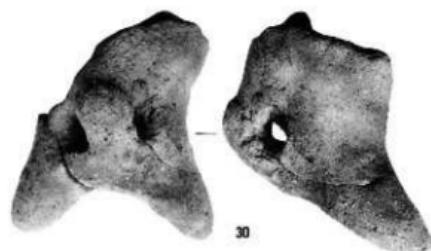
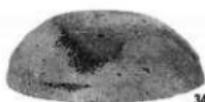


3 ST 4段状遺構
4 ST 5段状遺構



5 T-6全景
6 調査後道路遠景





S H I 住居状造構 出土遺物

アモウラ遺跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第36集

平成2年3月31日 発行

発行 津山市教育委員会

岡山県津山市山北520

印刷 有限会社 美成

岡山県津山市平福177-2
